

して、私は海よりも沼や山中湖畔の方面の水に接することを希望して居る、夏など旅行すれば、必と海岸でなく、山に足を運び、湖のある土地の幽趣に憧がれて居る。

自然はかくの如くにして、水に愛慕が深かった、高等小學に進む時、學校で何かの會が開かれた時、私も級の代表で、極く簡単な色彩の琵琶湖の景を出したことを記憶して居る。琵琶湖の水はその時からエメラルドグリーンを含むて居ると思つて居た。

中學に轉じた時には、繪葉書流行があつて、澤山繪葉書を買入れ、湖畔の景色を重にアルバムに挟んで恐悦がった。

かくして以來、私は繪畫の愛好者となり、手づからも繪を描き、水彩畫も描くやうになつた。水彩畫は日本の風景に適應した色彩であるといふ、この材料によつて、私が製作する湖水や、沼や、海の面は、いづれにもせよ、愛着やみがたい追懷の資料が伴ふ、水の感想であらう。

寫生紀行

仙臺 阪 秀太郎

空は強いオルトラマリんに澄んで白い綿の様な雲が所々にふはりく浮いてる。近頃に稀な好天氣なので程遠からぬ秋保温泉に寫生旅行を思ひ立つた。

午後の四時頃から例の七つ道具をかついで家を飛び出した。長町を西に折れ愛宕山の裏手をまつすぐに秋保街道を辿る。左は

見渡す限り田畝連き、遠くは大年寺山の端れに近く殘雪を頂いた奥羽山脈が薄いインディゴ色に蜿蜒と南に走つて居る。行くゆく農家にはコバルト色の紫陽花が所嫌はず咲いてゐる。小川がある、土橋がある。かうした道を行き過ぎると之からは只平らな山道を咀傳ひに行くのである。だんだん行くと右は見上ぐる様な山續き、峰連り、頂聳えて、近く重なり遠く望み路は山岨の斷崖の上を通つて居る。左は緑の草や灌木に埋められた深いく大溪谷で、下を流れてるのが名取川だ。急流は岩と岩との間を狂奔して水泡は眞白く雪のやうだ。三里程行くと右側の山はだんく開けて来て、平原の様な所に出る。其處に茂庭といつて一寸した氣の利いた村がある。此處の茶店に道具をおろして一休みする、ラムネに餅を平げてから鉛筆スケッチ一枚を得て出掛ける。茶屋の婆さんに聞くと秋保までもう二里だと云ふ。之から又前の様な山道だ、日は餘程低くなつたが未だ大分暑いので上衣を脱ぐ、左手の谷は岩が重なり合つて水は其間をくぐつて流れてる、と行手に當つて鞆の響がある、二三町行くと危うげな板橋があつて、深碧色の溪流はすぐ下の絶壁の邊から飛瀑となつて落ちてゐる、之は名高い大瀧と云ふのだ。途中行商人體の男に度々逢ひながら、行けば行く程谷は幅狭くなつて水車場が所々にある、道ばたの草の中には野葡萄の實が一面にある。日は漸く暮れかかつた、間もなく四邊は夕靄に閉ざれて山麓の茅舎から炊煙が立ちのぼる。もう秋保だといふ半里許り手前で日はとつぷり暮れた、暗夜の山道は物凄、名取川

上流仙人橋を渡つて爪頭上りの長坂四五町程登れば古びた温泉宿が並んで、三味の音、尺八の音、唄も聞える、此處が所謂秋保の温泉だ。

佐勘屋といふに道具をおろす。時に八時だ。何はともあれ疲をぬくために早速湯にはいる、浴室は粗末ではないがまるで音曲の稽古場といった有様、仕切なしの追分、ラツパ節、乃至ナンテマガインデシヨ節が絶えない。飯を食つてから間もなく床に入る、と雨が降つて来た、さあ明日の寫生が氣がかりで眠られぬ、色んなことを考へてる間に温泉の夜は更けて夜廻りの拍子木の音が寂しく聞える(某月一日)

四時に目覺む、顔も洗はずに寫生箱引つぱり出して川岸の崖縁に行く、彼方には翠巒長く續き其の中に見上ぐる芝山の様な滑かな丸い山が、まだ明けやらぬ灰色の空に接して、其はてにコバルトの連山が遙かに見える、そこをと、思つて早速三脚を据える、一時間程無言の業、描き終る頃に綠色の山また山は波濤の如く朝日に輝き出した。宿に歸り食後浴室を寫生する。それから又先の川岸の崖をおりて行くと途中に河原の温泉といふのがある、寛の水は水盤に溢れて落ちてゐるのに其又水の中には白の山百合が崩れる様に咲き亂れて、甘い香が頻りに鼻を襲つてくる。下へおりて行くと丸木橋が架かつて、川の兩岸は翠巒屏列して皆巉岩よりなつてゐて、瀧あり奔湍あり、碧潭あつて非常に畫題に富んでる。此處で道具を開き上の温泉宿を寫生する。ラストタツチを入れてる頃は身の圍りに沿客連が集つて

た。宿へ歸り晝飯後二三の鉛筆スケツチして歸途につく。家に著いたのは午後四時だつた。(某月二日)

野人語録

臺州 片 葉 子

○S君は書齋一ばいに、水彩畫やら、繪はがきやら張りたてて、得意がつて居る。御自身では美術家位にうぬぼれ給ふが、僕などの様な畫の意味の明らないものには、一向有難くも面白くもない。ごてごてした所、何だか繪はがき屋見た様だ。

○その又繪と云つたら、赤い繪具や、黄色い繪具やら、無暗に落してあるばかり。見てさへ早や胸先が悪くなる氣持がする。何だといへば、これが島だ。これが船だとき。奇想天外より落ちるとは蓋しこの事だ。須らく島や船に名札を付けて、見る人の誤解を矯め、奇想の落ち來る所を知らせるの必要がありはすまいか。

○S君が曰く、「繪を見て呉れる人の無いのは、僕の一大不満だ。この繪は、口で説明したつて分かるものでない。見る人の感想に突入つて、始めて價値が現れるのだ。天才を待つて始めて解せられるのだ。」と。

○僕は恥しめられた様な氣がした。僕の存在をS君は認めて居らぬ。無論批評などといふことは、こちらが御免蒙る方だ。けれども畫といふものは、畫かきが見て始めて分かるものかな。約束づくでわかるのなら、どこが文學と選ぶ所があるか。